

魔法のダイアリー プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：西川 和輝

所属：福岡市立老司中学校

記録日：2019年 2月16日

キーワード： コミュニケーション、生活支援、余暇支援、自己肯定感、スケジュール

【対象生徒の情報】

学年 中学3年生 14歳

障害名 知的障害 広汎性発達障害
IQ49 療育手帳 A2

障害と困難の内容

〈家庭〉

- 家族構成は、母、姉（通常高校3年生）、祖父、祖母、犬。母は、仕事をしていて、本人とゆっくり過ごせるのは、土日のみ。

〈学習〉

- ひらがなで文字を書くとき、濁点が抜ける。漢字はほとんど読めない。（小1程度）
- さまざまな取り組みに、やる気がないわけではなく、やるべきことを忘れている。

〈コミュニケーション〉

- 語彙は少ない。頻繁に使用する言葉は、「めんどっつい。」や「疲れた。」などで、このようなマイナスな言葉を、周りの反応を楽しむために使用する。
- 慣れた人と2語文の会話ができる。（「〇〇が楽しかったです。」と一言の感想も言える。）
- 交流学級の生徒とは、ほとんど会話ができず、「うん。」と頷いたり、笑顔で答えたりしている。
- 交流学級の生徒は、彼女のことが好きで優しく接しているが、彼女は、わからない世界なのか交流学級に行くことが嫌で泣いてしまう。（体育会、合唱コンクールなど大きな行事でのかかわりだけになっている。）

〈放課後・休日〉

- 放課後支援施設の利用はなく、習い事もしていない。（それなので、特別支援学級の生徒と家族としか接していない毎日である。）
- 「家で暇だから、家でもやりたいです。」と言って、宿題のプリントを与えたものから、さらにプリントを大量に持って帰ったり、授業で使用した課題（ペーパークラフト）を持って帰ったりしている。
- 平日の放課後の楽しみは、宿題か折り紙（折り紙の作り方のYouTubeを見ながら）。
- 休日は、家族が出掛けるところに着いて行くという過ごし方（主体的には行動していない。）

〈その他〉

- 運動不足（柔軟性がない、感覚統合ができていない。）
- 慣れた作業を丁寧に仕上げることができる。（ハサミ使いが得意、折り紙が好き。）
- 時間の感覚がない。「赤タイマー」のアプリなど、絵で終わりの時間を見通すことはできるが、時計が読めるということではない。文字盤は、デジタルは読めるがアナログは読めない。
- 天気予報をよく見る。（地名を覚えた。）
- 声かけやモデリングの対象がなければ、何もせずその場で立ったまま過ごすということが多くある。それなので、次の行動が遅れる。朝、自宅で家族がバタバタ準備をしているとき、自分自身で準備や登校する時間だという声かけがないとできない。

【活動目的】

当初のねらい

- ① スケジュールにそって自分で生活できる。(自発的な行動を増やすためのセルフマネジメントスキルの獲得)
 - (1) スケジュールの流れを把握する。
 - (2) 実際にスケジュール通りに行動する。
- ② 余暇の充実。
 - 好きなアプリを見つけて、使用する。

実施期間

平成30年6月～(継続中)

実施者

西川 和輝

実施者と対象生徒の関係

担任

【活動内容と対象児の変化】

学習目標①

スケジュールにそって自分で生活できる。(自発的な行動を増やすためのセルフマネジメントスキルの獲得)

対象児の事前の状況

- 声かけやモデリングの対象がなければ、何もせずその場で立ったまま過ごすということが多くある。それなので、次の行動が遅れる。朝、自宅で家族がバタバタ準備をしているとき、自分自身で準備や登校は声かけがないとできない。
- さまざまな取り組みに、やる気がないわけではなく、やるべきことを忘れてしている。

2月20日(水)		50分		15時 30分		下校		はし いる	
今日の行事		代議・専門委員会							
1	音楽 ●美術 先生 音楽室	●美術 先生 美術室	音楽 先生 音楽室	音楽 先生 音楽室	●保体 先生 体育館	●保体 先生 体育館	音楽 先生 音楽室	音楽 先生 音楽室	音楽 先生 音楽室
2	作業 先生 ひかり2	●保体 先生 体育館	●保体 先生 体育館	●保体 先生 体育館	●技術 先生 技術室	●技術 先生 技術室	作業 先生 ひかり2	作業 先生 ひかり2	作業 先生 ひかり2
3	●社会 先生 1-3	国語 先生 ひかり1	国語 先生 ひかり1	国語 先生 ひかり1	●技術 先生 技術室	●技術 先生 技術室	国語 先生 ひかり1	国語 先生 ひかり2	国語 先生 ひかり2
4	●美術 先生 美術室	保体 先生 体育館	保体 先生 体育館	保体 先生 体育館	保体 先生 体育館	保体 先生 体育館	保体 先生 体育館	保体 先生 体育館	保体 先生 体育館
給食	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5	数学 先生 ひかり1	数学 先生 ひかり1	数学 先生 ひかり1	数学 先生 ひかり1	数学 先生 ひかり1	数学 先生 ひかり1	数学 先生 ひかり1	数学 先生 ひかり1	数学 先生 ひかり2
6	x	x	x	x	x	x	x	x	x
持ってくるもの		体操服	体操服	体操服	体操服	体操服	体操服	体操服	体操服

2月19日(火)			2月20日(水)				
1	英語 先生	英語 先生	英語 先生	1	音楽 先生	美術 先生	音楽 先生
2	美術 先生	美術 先生	美術 先生	2	さまう 先生	保体 先生	さまう 先生
3	保体 先生	音楽 先生	国語 先生	3	社会 先生	国語 先生	国語 先生
4	保体 先生	保体 先生	保体 先生	4	美術 先生	保体 先生	保体 先生
給食	○	○	○	給食	○	○	○
5	総合 先生	総合 先生	総合 先生	5	数学 先生	数学 先生	数学 先生
6	x	x	x	6	総合 先生	総合 先生	総合 先生
						体操服 帽子	体操服

▲「週の時間割のプリント」や「ホワイトボードの時間割」に書かれた「教科」、「教員の名前」、「色」で交流授業であるか特別支援学級の授業であるかと場所の見通しを持てる。

活動の具体的内容

●iPad の「時計」アプリのアラームに自分で予定を入れ（かな入力か Siri）、それに合わせて行動する。〔**登校前**①起床 ②洗顔・歯磨き ③朝ごはん ④着替え ⑤出発 **帰宅後**①手洗い ②着替え ③次の日の準備 ④学習 ⑤晩御飯 ⑥入浴 ⑦就寝の準備 ⑧就寝〕（はじめ、「アラーム」ではなく、「リマインダー」の活用を考えていた。リマインダーへの入力が Siri でできるのだが、リマインダーの項目に対する音の分別ができないこと、音がなった後、その項目を iPad で確認しなければならないことがあり不便さを感じた。そこで、リマインダーからアラームへ変更。予定の時間が固定されてしまうのだが、登校前の入力をいっしょに行った。帰宅後は、登校前ができるようになってから取り組むようにする。）

※10月に、家庭（登校前・帰宅後）での取り組みが困難になったので、学校生活（休み時間・給食の準備）で取り組むようにした。〔**休み時間**①かたづけ ②じゅんび ③おちゃをのむ ④つぎのじゅぎょうへむかう **給食の準備**①かたづけ ②てをあらう ③きゅうしょくをとりにいく ④へんきやく ⑤5じかんめのじゅんび〕



▲アラーム入力（3人で取り組んだ際、自分のサウンドを決めて設定）



▲休み時間すべきことを1分きざみで設定



◀はじめは、アラームと止めず無視していたが、クラスの生徒3人で取り組むことで、他の生徒のアラームまで止めようとしている様子

●6月から9月まで、Siri でのアラーム入力が、恥ずかしがってできなかった。また、小さい発声を Siri が認識できなかった。かな入力は、入力する項目を指示すると長い時間をかけてできる。それなので、かな入力を続けている。アラームに合わせての行動は、どの音に対してどの行動をするという区別をすることの目標設定が高かったようでできていない。それなので、アラームと DropTalk のスケジュールに合わせて行動するという目標に変更する。毎日繰り返すことで、覚えることはできてきた。学級の中で、一人だけ iPad のアラームの音を消すという活動を嫌がっていたが、学級の生徒全員に一人1台ずつ iPad を与え同じ活動をするという取り組みはじめ、軌道にのった。



▲休み時間と給食準備のスケジュール

▲③おちゃをのむ



▲⑥てをあらう



▲⑧きゅうしょくをたべる



▲⑩かえりのかいへいく

始めに、挙げた事柄を Drops のシンボルと対比する学習をした。次に、①の活動のアラームがなった後に、Drops のシンボルを見て実際にその行動を教師といっしょに行った。この活動も一人でしている時は、嫌がっていたが、学級全員の生徒ですることに取り組んでいる。友達がスケジュールの確認をいっしょに行う様子も見られた。

学習目標②

余暇の充実。(好きなアプリを見つけて、使用する。)

対象児の事前の状況

- 放課後支援施設の利用はなく、習い事もしていない。(それなので、特別支援学級の生徒と家族としか接していない毎日である。)
- 「家で暇だから、家でもやりたいです。」と言って、宿題以外に、さらに課題プリントを大量に持って帰ったり、授業で使用した課題(ペーパークラフト)を持って帰ったりしている。
- 平日の放課後の楽しみは、宿題か折り紙(折り紙の作り方の YouTube を見ながら)。
- 休日は、家族が出掛けるところに着いて行くという過ごし方である。(主体的には行動していない。)

活動の具体的内容

- iPad に余暇で利用できるアプリを入れて、まずは、学校の学習の中で体験する。家庭では、家庭の方に本人といっしょにはじめは、アプリを選択し、利用する。いくつかアプリをいれて体験した中で、「メッセージ」が一番楽しいようで、写真やスタンプや簡単なメッセージのやりとりをしている。メッセージの入力は、かな入力でするとできる。7月から現在まで宿題として、一枚の写真とメッセージを課題として続けている。



▲「メッセージ」に挑戦

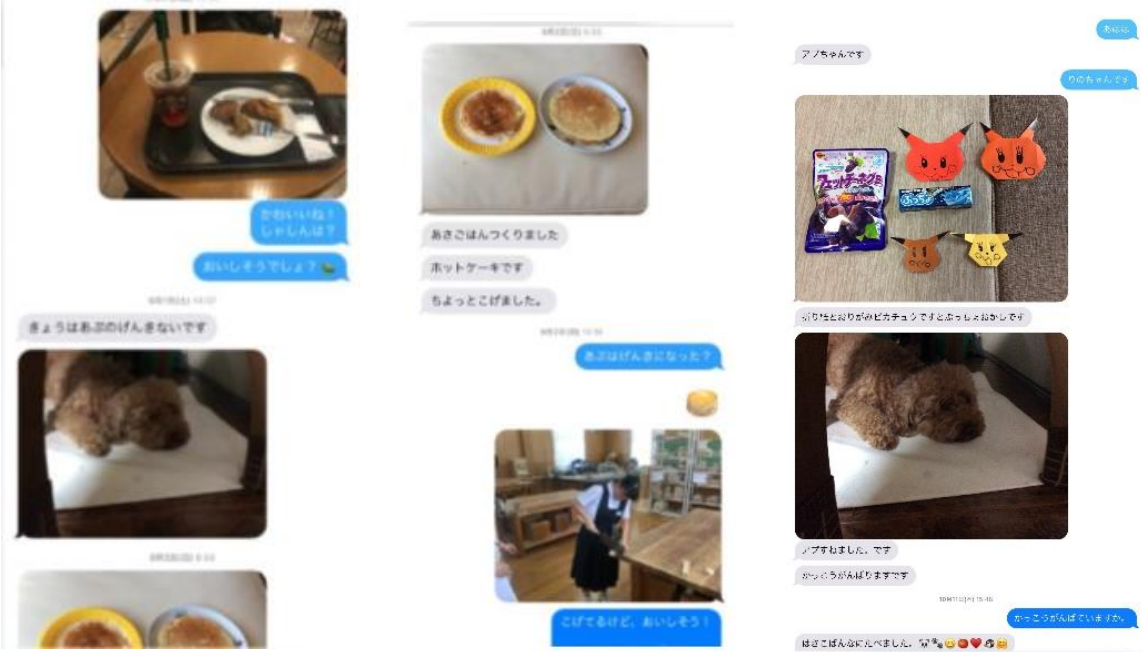


▲友達と「メッセージ」のやりとり

- 「メッセージ」では、はじめは送信する写真に悩んで、家族といっしょに撮影していた。家族も良い写真を撮ろうとしていたので、送信する写真がないと本人が苦しむことがあった。気軽な写真で良いことを学校の学習の中で、文房具や植物、空などを撮って説明することで、理解させると、毎日気軽に楽しく送信ができていた。スタンプで気持ちを伝えたりもできてきた。メッセージは、「おこのみやきです」や「おやつです」でこちらの次の質問の「おいしかった？」の返信ができない。でも、スタンプで返すことはできている。
- 友達との会話の中で、自分から質問をすることはなく、楽しいことを共有していっしょに笑ったり、授業がきついつきに「めんどくさいね!」と言ってきついことを共有したりすることが会話の内容だった。しかし、「メッセージ」を使用しはじめて、スタンプや画像を自分から発信することで、自分から会話ができるようになった。



「メッセージ」



▲担任と自宅からの「メッセージ」のやりとり

対象児の事後の変化

学習目標①

- 音がなることで、何かしなくてはいけないと気付けるようになった。
- 取り組みや次の行動への声かけやモデリングがなくてもできるようになった。

学習目標②

- 気持ちをスタンプで伝えることができるようになった。
- 友達との会話のツールになった。

【報告者の気づきとエビデンス】

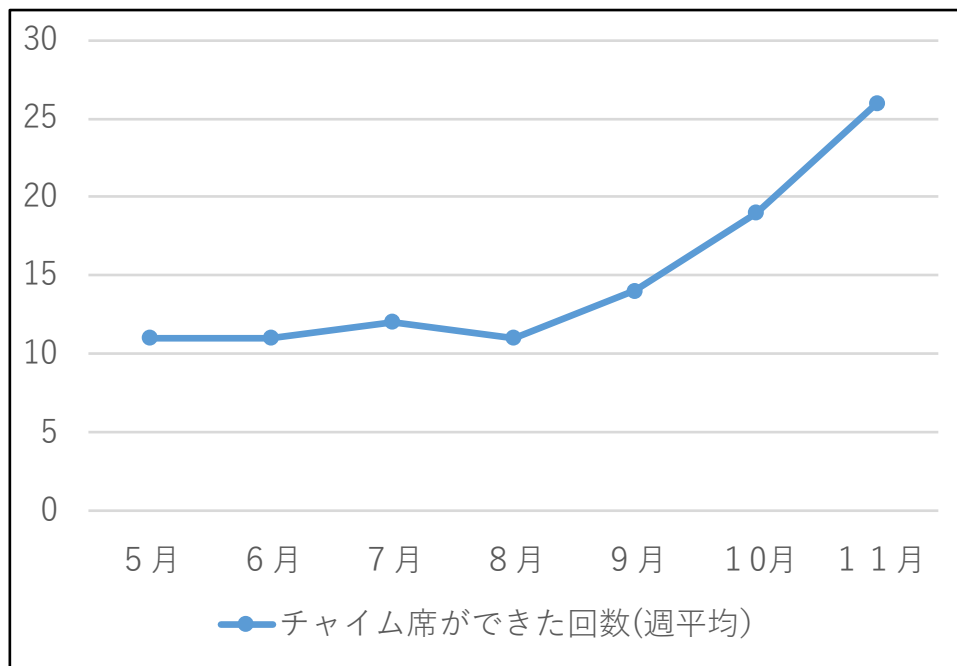
主観的気づき

- 視覚的情報の役割→声かけよりもイラストで表現されていることで、活動がわかりやすくなったのではないかな。
- 能動的な活動へつながった→教員や友達の声かけよりも自分で気づけること(iPadのアプリの活用)で意欲があがっているのではないかな。

エビデンス

(5月から11月までの「チャイム席(授業開始2分前までに席に座っていること)ができた回数」から)

- 4月は、「授業はじまるよ!」という声かけをすると、水筒のお茶を飲む行動をとってチャイム席はできず授業には、5分遅刻することが多かった。Drop Talk、時計の使用し始めの5月、6月は、iPadを拒否していたので、「チャイム席ができた回数」の変化はなかった。7月から対象者だけではなく、別の生徒にも同じ活動を取り入れると、iPadへの拒否がなくなった。アプリを使用することに慣れると、いつの間にか授業の教室に移動する様子が見られるようになってきた。



その他エピソード

【家庭での気づき】

●家庭では、「皿洗い」や「洗濯物をたたむ」などの手伝いを言われる前に自ら進んで行えるようになった。学校での取り組みで自発的に行動する楽しさを覚え、家庭でも実践している。自発的に取り組めるようになったのは、今までは何をしていたかわからず、友達の行動を必死に見て行動していたり、教員や友達の呼びかけで動いていたのが、dropsのシンボルを見ることで、誰からも指示を受けずに行動できる気持ち良さや、楽しさを感じたからだと考える。その行動後、教員や友達から「早く来てね！すごい！！」と言われることの達成感もあったはずである。1日の行動を達成することの繰り返して、1日の行動が一人でできるようになることで、見通しが持てるようになり、学校生活が楽しくなったように感じる。



▲さまざまな活動を自発的に楽しめている様子

【今後の見通し】

●休み時間から授業への活動ができるようになってきたので、授業中の活動のDropsのシンボルとその順番を教師といっしょに作成することで、能動的に学習できるようになることを考えている。先日、国語の授業中の活動のDropsのシンボルとその順番を選択しながら、教師といっしょに作成した。その流れで、能動的に学習できている。学習、生活のあらゆる場面で少しずつ能動的に活動ができる幅が広がっていけば良いと考えている。



◀国語の授業の中の活動の Drops のシンボルとその順番を選択しながら、教師といっしょに作成

- 3月で中学校を卒業し、特別支援学校高等部へ進学予定。「これからも彼女が学習や生活に ICT が必要であると感じること」、「進学先でも ICT が使用できる環境を整えること」が私の課題である。2月28日に今度、進学する特別支援学校のコーディネーターリーダーに実際に学校生活の様子を見ていただいて、引継ぎをした。授業という枠を超えて、能動的に生活ができるツールになれば良いと考える。